「運命」と自我との相剋

——W. H. オーデンとフィリップ・ラーキンを中心として（1）

河　崎　征　俊

人間の自我が今日ほど圧迫され，脅かされた時代はこれまでほとんどみられなかった，ということばはクリーチェに近い存在になってしまっているが，人間がみずからの「運命」を有するかぎり，また一個人としての自由を有するかぎり，そのことばがますますわれわれの現実にさまざまな形で影響を及ぼしてくることは否定できないであろう。圧迫は外的なものばかりではないからである。自我への眼と客観的な姿勢によってフリーダムの王国を建設する人間ならば誰でも，この事実にうすうす気づいているに違いない。人間はおのれの内的風景を確実に把握し，それにとらわれずに新たな出発をしないかぎり，真のフリーダムは決して得られないものである。なかでも詩人は，現代のような状況においては，おのれの外的なものと内的なものとの矛盾や葛藤を認識しなければ自我の他者への影響は考えられないであろう。

詩人は，現実生活から生まれるありとあらゆる葛藤や矛盾や抵抗意識などによって，内的活動へと向かう意識を獲得するものである。この内的活動がいわゆる想像力であり，この想像力によってこの現実を変革してゆくといえよう。人間はみずからの状態を認識して出発しないかぎり，自由な精神（つまりフリーダム）を所有することはできない。日常生活はさまざまな形で自由な意志に圧迫を加えているものである。この度合は歴史によって違いがあろうが，統制化とか公式化というものが生活の中に浸透し，ひいては人間の意識の中にまで浸透して，脅威を与えているのである。だが，芸術家は狭義の日常的概念に従うべきでないことは明らかであろう。彼はそのような概念に抵抗して生まれる内的な力を通して新たなリアリティーを得るのである。現代詩人を理解する場合，まさにこの点が出発点となっているといえよう。

W. H. オーデンの作品をながめてみると，観念と現実との関係が詩人の魂の中に原初的な形態で初めから備わっていたことがわかる。彼の魂の中を浮遊する亡霊は，まさに「運命」と自我との対決から生み出された抽象的な観

念のようであるが，それは彼の実存過程によってしっかりと裏づけされている。さもなくばオーデンの詩的イメージはふくらむことは決してなかったであろう。もともと詩が扱うのは曖昧性であり，無意識を描いた地図帳であり，メタファーであり，現実の観念をふくらませるイメージなのだ。描かれた観念の中に詩の思想が流れていなければ詩人の生命，すなわち現実に生を営む一般の人々に対する詩的意義は皆無となってしまうであろう。

オーデンは非凡な強烈なイメージ構成能力に加えて幾何学的な秩序を求める強靱な欲望を兼ね備えているといえる。彼はおのれの生存過程の中からたえず形式を抽出しようとしている職人である。彼の 'Like a Dream'「夢のように」は次のようになっている。

This lunar beauty
Has no history,
Is complete and early;
If beauty later
Bear any feature,
It had a lover
And is another.

This like a dream
Keeps other time,
And daytime is
The loss of this;
For time is inches
And the heart's changes,
Where ghost has haunted
Lost and wanted.

But this was never
A ghost's endeavour
Nor, finished this,
Was ghost at ease;
And till it pass
Love shall not near
The sweetness here,
Nor sorrow take
His endless look.

"lunar beauty" にはまったく時間的な「歴史」はみられず，それは一瞬の美としてわれわれの眼前に現われているだけである。そもそも美というものは一瞬の形而上学なのだ。したがって，時間とは「小さなもの」("inches") であり，しかも「心の変化するところ」("heart's changes") でしかないのである。ここに描かれた「美」("beauty") と「夢」("dream") は，オーデンの「運命」と自我との相剋を表わす「亡霊」("ghost") という漠然たる曖昧な単語によってイメージが結びつくのであるが，「昼間」("daytime") との対照によってさらにオーデン独自の形式が生み出されてくるのである。この「亡霊」("ghost") ということばは，オーデンの抽象的世界をさらに強く暗示しているメタファーとみることもできる。オーデンは抽象語の力を極めて強く意識しているため，このような抽象語をすぐさま具体的なメタファーに転化させてしまうわけである。

長々しい錯綜したイメージを取り扱う場合でさえ，彼はみずからの知性から生まれる観念をいたるところで用いているのであるが，その観念は彼の実存の場から昇華されたものであるため，詩的リアリティーは現実から切り離されてはいないのだ。彼はおのれの「運命」の動きを忠実にみつめながら，心の中の世界を客観的なことばによってわれわれに伝達しようとしていると考えられる。しかしそれは直接的なレポートではなく，間接的なメタファーによってなされているといえよう。

一人の人間がたどる「運命」を一種の物語風に描いたのが 'The Wanderer' 「漂泊者」という詩である。この詩のでだしは，'Like a Dream' 「夢のように」に出てくる "ghost" 「亡霊」の色彩イメージをさらに暗くさせ，深刻さの中へとわれわれを連れて行ってしまうのである。本質的には，オーデンは「旅人」であるため，積極的な行動に向かって出発する人間の身の上にふりかかる威嚇の感覚を創造してゆかざるを得ないのかも知れない。

Doom is dark and deeper than any sea-dingle.
Upon what man it fall
In spring, day-wishing flowers appearing,
Avalanche sliding, white snow from rock-face,
That he should leave his house,
No cloud-soft hand can hold him, restraint by women;
But ever that man goes
Through place-keepers, through forest trees,

A stranger to strangers over undried sea,
Houses for fishes, suffocating water,
Or lonely on fell as chat,
By pot-holed becks
A bird stone-haunting, an unquiet bird.

There head falls forward, fatigued at evening,
And dreams of home,
Waving from window, spread of welcome,
Kissing of wife under single sheet;
But waking sees
Bird-flocks nameless to him, through doorway voices
Of new men making another love.

Save him from hostile capture,
From sudden tiger's spring at corner;
Protect his house,
His anxious house where days are counted
From thunderbolt protect,
From gradual ruin spreading like a strain;
Converting number from vague to certain,
Bring joy, bring day of his returning,
Lucky with day approaching, with leaning dawn.

オーデンはこの詩の中で漂泊者という象徴的な意味を持った人物を描写し，おのれの心の姿をそれに託しているように理解される。花々が咲き誇る春という季節に自分の家を出て，数々の試練を経て孤独に浸りながら，おのれの行く末知れぬ生をながめているのである。ここでオーデンはわが身を"A bird stone-haunting, an unquiet bird"「石にまつわりつく鳥，心休まぬ鳥」という表現で象徴化しているのであるが，漂泊者の不安が一匹の宿のない鳥によってみごとに具象化されている箇所として評価されるであろう。この漂泊者の疲れ切った夕べの想いの中にわが家の状況が不安と結びついて浮かんでくるため，彼は魂の苦悩に堪えなければならないのだ。その幻の中では，どうやら女房は別の恋をしているらしいのである。一瞬夢から覚めると「名前のない鳥の群れ」が眼の中に飛び込んでくるが，彼はこのわけもわからぬ鳥の群れと，わが家からもれる声とが二重写しとなって迫ってくるのを

実感するのである。最後の連で詩人オーデンはいうなれば神への祈願という形でおのれの流れゆく所定めぬ漂泊を顧みて神にすがるのである。結局，数字を“vague”「曖昧なもの」から“certain”「確実なもの」へと転化してほしいと願う詩人は，幸運に満ちた暁の女神を希求しているものとみれるであろう。

この詩は一見具体性のないようにみえるが，その底流には社会という外的世界と個人という内的世界との相剋から生まれる果てしない不安や葛藤が具象化された形で顔をのぞかせているのである。春のある日，運命(神の審判)に従って家を離れて，海を越え山を越え，あらゆる危険を乗り越えてゆくというパターンは，古代英詩や中世英詩からヒントを得ているように思われる。同じ題名の *Wanderer*『漂泊者』と題するアングロ・サクソンの詩があることからしても，彼が明らかにこのような詩から深い影響を受けていることは否定できないであろう。このように，オーデンのこの詩は緻密な音韻の配置と新鮮奇抜なイメージとオーデン特有のテーマとが渾然一体となった作品として銘記しなければならない。

オーデンの「社会的関心」と呼ばれるものは，彼が生きた時代すなわち「不安の時代」への時代的感覚から生み出されたものであり，それゆえ極めて実存的と呼びうる感覚である。彼がマルクス主義に支えを求めたのはまさにこのような感覚があったからであろう。一方，彼の「心理的関心」と呼ばれるものは，社会が崩壊しそれとともに人間個人の自由を所有する人格が失われてゆくとき，人間がそれに対してどのような治療と努力を続けてゆくべきなのか，といった一種のもがきにも似た関心である。フロイトやローレンスがこれを支えているのはいうまでもない。詩人オーデンにとって，この二つの関心は必然的で不可避的なものであったといわなければならないであろう。しかしさらに重要なことは，この二つの関心が別箇にとらえられているのではなくて，緊密な複合体としてとらえられているということである。

社会の中でおのれを正確にとらえ，しかも自分の故郷をあらゆるものを含めた総合的立場で愛するためには，詩人はどうしてもアウトサイダーの立場をとらざるを得なかったのだ。それは1936年の *Look, Stranger!*『みよ，旅人よ！」を読めば判然とするであろう。ちなみに，1936年（つまり，オーデン29歳のとき）という年はスペイン内乱の勃発の年であり，戦争やファシズムの脅威に反抗する人民戦線の結成など社会的に緊迫した年であり，文学的には「三十年代の文学」が最高潮に達した年である。*Look, Stranger!*「み

よ，旅人よ！』はくしくもスペイン内乱が勃発した年に生まれたのであるが，オーデンが孤独に目覚めてゆく過程の中でみずからを「旅人」(Stranger)にみたて，みずからの国を「みよ」(Look) と主張している点には，見逃すことのできない意味が含まれているといえよう。この詩を読めばわかるように，この詩から想起されるものは英仏海峡にのぞむ小さな海港の夏の午後の情景である。青い空，青い海，空間を設定するにはやはり夏の午後でなければならないであろうが，ギラギラする真夏の太陽の光線は，血を流しながらなおも戦い続けようとする戦士のイメージにもつながっていることに注目しなければならない。詩人はこの空と海との間に静かに横たわっている，まるで生物のような空間の情景に，みずからの理想とする調和の世界をとらえながら，一方において，太陽の光線を「秩序の消えた世界」つまり自然の調和を乱す「戦いの場」ととらえ，イメージを飛翔させているのである。「調和」と「無秩序」というアンチテーゼはどの時代にもどの世界にも存在するものであるが，特に1930年代という時代状況の中では極めて強く意識された概念であったであろう。このような中にいて詩人が調和を求めないということは考えられない。したがって，詩人は「旅人」にならざるを得ないのだ。オーデンは1930年のイギリスに対し常に「旅人」の姿を崩したことはなく，中心からよりもむしろ周辺からイギリスという島国に眼を向けていたのである。だが，えてして時代の流れが早い時期には真理の求道者は中心から引き離されてしまうものである。また，道を求めるためにはどうしてもアウトサイダーの立場を保持しなければならないという皮肉も生まれてくるものである。結局，オーデンはみずからの意志を貫くために，行動のテーマとして普遍的な存在を選択しなければならなかったのであろう。

"*Look, Stranger!*『みよ，旅人よ！』以前に，自己のきびしい選択を迫られる詩があることに注目しなければならない。例えばそれは，'*1929*'「1929年」という詩であるが，この詩では個人の不安と恐怖とがより直接的に表出されているものと思われる。

It was Easter as I walked in the public gardens
Hearing the fogs exhaling from the pond,
Watching traffic of magnificent cloud
Moving without anxiety on open sky——
.....
But thinking so I came at once

Where solitary man sat weeping on a bench,
Hanging his head down, with his mouth distorted
Helpless and ugly as an embryo chicken.
……

この詩はオーデンの初期の詩の中で最も美しいもののひとつに数えられていることで有名だが，この時代にオーデンがすでに実存主義の問題に探りを入れていたことがこの詩から知らされるのである。つまり，孤独が人間の真の条件である，といった自覚がここにうかがい取れるのである。詩人オーデンは実存主義のパターンに従いながら人間個人の不安と恐怖に注目を向けているのだ。公園の中を歩きながら周囲の姿に底知れぬ不安の影をとらえる詩人は，移りゆく世の中（それは "traffic of magnificent cloud / Moving without anxiety on open sky"「広々とした大空で何の不安もなく流れてゆく壮大な雲の姿」によって暗示されているが）のために新しいことばを発見しようともがくのだが，そこには孤独な男がベンチに腰かけて泣いている情景があるだけなのだ。それはさらに，控壁の上でいねむりをしたり，とまったり，水面に水掻きを立てている一群の鴨に投影され，まるで何事もなかったかのような静寂さを作り出している。だが，これは不安を暗示するアイロニーなのだ。

All this time was anxiety at night,
Shooting and barricade in street.

詩は個人の不安から社会構造の不安定性へと移ってゆく。"night"「夜」が "anxiety"「不安」の度を増し，「最期の戦争」の恐怖をわれわれに呈示しているのであるが，"Shooting and barricade"「銃声とバリケード」の地下ではナチズムとコミュニズムとが互いに抗争しながら繁殖し続けているのである。すなわち，破滅の日々がわれわれを待ち構えているという不安が日常生活に立ちはだかっているのだ。オーデンの中心的なことばが "loneliness"「孤独」であることは，彼の初期の作品から後期の作品を通して一貫しているものと思われる。彼の人間に対する救済の問題は，健康と疾患という関係でとらえられているため，人間を救うには治癒が不可欠となる。したがって，「孤独」ということばは，人間と人間との結合の欠如を示すためのパラドックスなのだ。"A stranger to strangers"「見知らぬ人から見知らぬ人

人の中を」(「漂泊者」) という表現には，オーデンを理解するための重要な鍵が潜んでいるものと思われる。

Startled by the violent laugh of a jay
I went from wood, from crunch under foot,
Air between stems as under water,
……

現代人は森の生命に魂の安らぎを求めても，しょせん理想のアルカディアはないのだ。アルカディアの中に地獄の軍隊が行進して，その森の精を銃で皆殺しにしてしまったからである。したがって，オーデンにとってみれば，おびえた魂はこの生命の源から離れてゆかなければならないことになる。となると人間は何と孤独なのであろうか。鳥の鳴き声も救いのてだてとならないのだから。しかし，孤独な人間は孤独な人間と相対し，それを分かち合いながら生を営み続けているのである。いや，営み続けなければならないのである。

孤独は形式的な意味だけでとらえられうるものでもない。みずからの鋭敏で沈着な周囲への観察が詩人の生を価値あらしめる武器となるのである。「1929年」という詩の中を放浪する詩人の魂はこの世の中を放浪する魂でもあり，常にもうひとりの孤独な魂をみているといえよう。孤独な創造の魂は，この不完全な現実の姿を鋭利な心理的直観によって解剖し，人間的存在の喜びや悲しみを抒情性豊かに知覚し，融合させようとするものである。オーデンの視点はまさにここにあるものと思われる。オーデンがとらえる自由な人間とは，あの帰ってきた征服者でもなければ，両極を周航する人間のことでもないのである。自由な人間とは，日中，家から家へと旅を続け，恋の誠実さと恋のもろさを背負いながら，本質的な平和への長い道を歩いている人間なのだ。したがって，オーデンの自由な気質をとらえる場合，彼の実存主義的側面を無視して，政治的側面だけでとらえるのは不当であろう。オーデンの「運命」と自我との相剋は，すでに取り上げた 'The Wanderer,「漂泊者」の中で十分示されているということを念頭に入れておくべきであろう。

(未完)

〔参考文献〕

1) *Collected Poems* (Faber, 1976)
2) John Fuller; *A Reader's Guide to W. H. Auden* (Thames & Hudson, 1970)
3) 中桐雅夫・徳永暢三・松田幸雄訳『オーデン・スペンダー・トマス詩集』(「世界詩人全集十九」新潮社，昭和44年)
4) リチャード・ホガート，虎岩正純訳『オーデン』(研究社，昭和48年)
5) リチャード・ホガート，岡崎康一訳『オーデン序説』(晶文社，昭和49年)
6) 平井正穂・高松雄一編『イェイツ・エリオット・オーデン』(筑摩世界文学大系七十一，筑摩書房，昭和50年)
7) 沢崎順之助他『現代詩（シンポジウム英米文学五)』(学生社，昭和50年)